

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K11026

研究課題名(和文) 特別養護老人ホームの認知症者への誤嚥性肺炎予防に必要な看護師のコンピテンシー構築

研究課題名(英文) Development of nursing competencies required to prevent aspiration pneumonia among people with dementia in special nursing homes.

研究代表者

天木 伸子 (amaki, nobuko)

愛知県立大学・看護学部・講師

研究者番号：40582581

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：特別養護老人ホームで勤務する看護師のコンピテンシーについて概念分析を行った。その結果、高齢者の特性に応じた健康を維持する実践力が明らかとなり、それには、摂食嚥下機能障害に対するケアや、誤嚥予防に関する実践力が含まれていた。次いで、特養の看護職と介護職を対象に誤嚥予防ケアの実践についてグループインタビューを行った。誤嚥予防のケアは11個のカテゴリが抽出され、【摂食嚥下機能にあった食形態の調整】、【頸部前屈位で体幹が安定する姿勢調整】などが明らかとなった。誤嚥予防ケアで対応困難と感じることは2個のカテゴリが抽出され、【認知症や難聴のある人の摂食嚥下機能低下への対応が困難】などが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

特別養護老人ホームの高齢者が入院する要因疾患の1つに誤嚥性肺炎があり、誤嚥性肺炎予防ケアの質向上が求められている。特養の看護師のコンピテンシーの概念分析によって、摂食嚥下機能障害に対するケア、誤嚥予防に関する実践力の重要性を明らかにすることができ、インタビュー調査により誤嚥性肺炎の実践および困難内容を明らかにしたことは、看護師のコンピテンシーモデル開発の基礎資料とすることができたと考える。研究成果を実践能力育成につなげることで誤嚥性肺炎のリスク低減の一助となる。

研究成果の概要(英文)：A conceptual analysis was conducted on the competencies of nurses working in special nursing homes. The results revealed practical competencies required to maintain older adults' health based on their characteristics, such as competencies related to aspiration prevention and easing feeding and swallowing dysfunction. Next, group interviews on aspiration prevention care practices were conducted with nursing and caregiver professionals working in special care homes. Eleven categories were identified regarding aspiration prevention care, such as [adjusting the food form to suit feeding and swallowing functions] and [adjusting the posture to stabilize the trunk in the cervical forward bending position]. Two categories were identified regarding the difficulties faced in aspiration prevention care, including [Difficulty dealing with the decline in feeding and swallowing functions in people with dementia and hearing loss].

研究分野：老年看護学

キーワード：誤嚥性肺炎予防ケア 特別養護老人ホーム

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本人の死因第5位(2018年)である肺炎患者の約7割を75歳以上の高齢者が占め、高齢者肺炎のうちの7割以上は誤嚥性肺炎である(厚労省,2016)。特別養護老人ホーム(以下、特養)から医療機関への入院理由は肺炎が約3割と最も多く(厚労省,2017)。老人保健施設との比較においても特養は老人保健施設の3倍の発症率であり(桑澤ら,2011)、特養での誤嚥性肺炎の発症頻度が高い。

誤嚥性肺炎が高齢者にもたらす影響は大きく、入院治療による臥床時間の延長などを誘因としてADLや意欲の低下が報告されている(相川ら,2012)。特養入所者の8割は認知機能や身体機能の低下した要介護度3以上であり潜在能力の低さから、誤嚥性肺炎発症後に著しくQOLを低下させることや死亡要因となる危険を持つ。さらに、誤嚥性肺炎発症により家族介護者の医療費負担、入院期間3か月超過で退所を迫られると退院場所探しの負担が生じる。

誤嚥性肺炎の予防的介入に関する研究報告は散見され、不顕性誤嚥に関連した誤嚥性肺炎では専門的口腔ケアのエビデンスが示され、歯科医や歯科衛生士による専門的口腔ケアの導入により発熱発生数を減少させている(日本呼吸器学会,2011)。一方で、口腔ケアの有効性を高めるためには、施設職員の日々の口腔ケア実践力の向上が課題とも言われている。

誤嚥予防については、特養の看護師は、嚥下状態に応じた食形態変更の自律性は高いものの(森ら,2014)、介護者と連携した口腔嚥下機能訓練や嚥下困難者に対する食事介助の連携は不足している(笹谷ら,2013)。特養の介護職を対象にした調査では、嚥下や食事の形態に関すること、介護技術に不安を感じていた(川西ら,2013、杉谷ら,2005)。また、口腔ケアや食事介助について認知症高齢者へのケアに苦慮する場面も多い。よって、特養の看護師は、主に介助をする介護士が不安なく安全な食事介助ができるよう連携を重んじ、協働しながら専門的能力を発揮する自律性やリーダーシップが求められている。

以上より、誤嚥性肺炎の罹患者が特に多い特養では、入所者のQOL維持のために誤嚥性肺炎予防のケアの充実に向けたニーズが高いことが分かる。さらに、特養の入所者背景から認知症症状にも配慮した誤嚥性肺炎の予防ケアの充実が必要となる。

2. 研究の目的

特養の高齢者に対する誤嚥予防ケアに必要な実践能力を解明し、コンピテンシー構築の基礎資料とする。

3. 研究の方法

(1) 文献検討、概念分析

施設職員が行う誤嚥性肺炎の予防について文献検討、概念枠組みの作成を計画した。

文献検討は、高齢者施設における誤嚥性肺炎について、キーワード「介護老人保険施設、誤嚥予防ケア、誤嚥性肺炎」を組み合わせ実施した。

概念分析は、誤嚥予防だけでは文献が不十分であり、「特別養護老人ホームで働く看護師のコンピテンシー」について、Walker & Avant (2008) の概念分析の手法を用いた。選択した概念の特性を検討するために、言語辞典、看護辞典、関連書籍、高齢者施設ケアに関する国内の研究論文をもとに分析を行った。対象の文献は、医学中央雑誌 Web 版を用いて「特別養護老人ホーム」 and 「(専門能力/TH or コンピテンシー/AL) or (臨床能力/TH or コンピテンシー/AL)」で検索を行った結果、85 件の文献が抽出された。また、PubMed を用いて検索ワード「competence , nursing home」を検索した結果 964 件が抽出された。今回は和論文を用いて分析を進める。特養における看護師のコンピテンシーに関連した記述のある 12 文献、関連する書籍 2 冊を分析の対象とした。

(2) 特養の誤嚥性肺炎予防ケアと実践上の困難

フォーカスグループインタビュー法(FGI)を用いた質的研究。研究対象者は、2施設の特養に勤務する看護職・介護職計11名(看護師2名、介護士9名)を対象とした。データは、インタビューガイドに基づき、「誤嚥性肺炎を予防するために心がけて実施している援助内容および援助時の困難」に関するグループインタビューを60分程度で実施してボイスレコーダーに録音する。その録音内容から作成した逐語録をデータとする。また、研究参加者の基本属性を収集する。インタビューはインタビューガイドを用いて、「誤嚥性肺炎を予防するために心がけて実施している援助内容および援助時の困難」について収集する。分析は、インタビューの音声録音を逐語録にしたデータから、誤嚥性肺炎を予防するための援助内容、援助時の困難について具体的に語られている部分を可能な限り研究参加者の言葉を用いて抽出する。抽出した部分をコード化し、類似した内容をカテゴリ化してその意味内容を表すネーミングを行った。

4. 研究成果

(1) 文献検討

誤嚥性肺炎の発症に関わる要因は、一般的に口腔の衛生状態、接触嚥下機能、栄養状態、内服

薬の副作用、認知機能と多岐にわたる。これらの要因への対応として、口腔ケア、リハビリテーション、栄養管理を行うことを推奨されている。特別養護老人ホームにおける肺炎予防を検索した結果、歯科衛生士による口腔ケアについては誤嚥性肺炎の発症リスクを低減したことが示されていた。しかし、機能的口腔ケアの実施や、嚥下機能評価、栄養管理、内服薬の副作用アセスメントの実施結果を示す研究報告はみられなかった。口腔ケアの効果について研究報告が累積される一方で、経管栄養管理をしている高齢者について、専門的口腔ケアを実施しても下咽頭部に残留する起炎菌を排除することが難しく、嚥下機能の低下によって不顕性に気管内へ入っている可能性が指摘されていた。高齢者の嚥下機能により口腔清掃に加えて嚥下訓練を実施することがさらなる効果が期待できることが示唆されていた。職員の口腔ケアへの認識調査では、職員の口腔衛生や口腔ケアへの関心は高く、95%の職員が教育機会を得たいと希望していた。また、約半数の職員が口腔ケアの実施負担を感じており、ケア技術の負担が少なく効果的に実施できる口腔ケア方法の開発が必要であることが示された。

(2) 特別養護老人ホームで働く看護師のコンピテンシーの概念分析

特養における看護師のコンピテンシーについての記載内容を抽出し、類似性により整理したカテゴリを命名し、6つの定義属性を示した。

定義属性は「高齢者の価値観を尊重して生活を支援する力」、「高齢者の特性に応じた健康を維持する力」、「日常生活の延長線上にある自然な看取りを支える力」、「多職種と連携・協働する力」、「家族の心情を理解して支える力」、「ケア実践を通して自他が自己研鑽に臨めるようになる力」であった。また、先行要件は「特養での看護師経験年数」、「特養の看護師として仕事を肯定的にとらえる」、「学位や教育水準」、「研究会の参加」であり、結果は「高いケアの質」、「高い利用者満足度」となった。

(3) 特養における誤嚥性肺炎の予防ケアと実践の困難

対象者

インタビュー参加者の平均年齢は 42.6 ± 8.3 歳、職種は介護福祉士 9 名、看護師 2 名であった。高齢者施設での通算実践経験年数は 11.4 ± 5.0 年であった。誤嚥性肺炎の研修会参加は、施設内で参加経験あり 45%、参加経験なし 55%。施設外では、参加経験あり 9%、参加経験なし 91%であった。

参加者の所属施設(2施設)は、施設種別がユニット型と従来型の1施設ずつであり、入所者の平均年齢 88.1 歳、平均要介護度 3.9 であった。加算取得状況は、A 施設で口腔衛生管理加算()を取得しており、B 施設は経口維持加算()()を取得していた。

誤嚥性肺炎予防のためのケア内容

分析結果により、誤嚥性肺炎予防のためのケア内容として、11の【カテゴリ】が抽出された。

施設職員は、摂食嚥下機能低下のある高齢者に対する誤嚥予防のケアとして、【摂食嚥下機能にあった食形態の調整】、【頸部前屈位で体幹が安定する姿勢調整】を行っていた。食事介助時は【一口量やペースの調整】に配慮し、【多職種の協働による誤嚥リスク者の安全な摂食環境の調整】を行っていた。咽頭残留がある場合は【咽頭残留音には食事停止、姿勢調整、空嚥下を行い、最終手段で吸引実施】により対応していた。近年は、【食事の量より安全で楽しい食事を大切にする】ようになり、無理にたべさせない援助に変容してきている語りが聞かれた。また、【口腔ケアの充実による口腔内衛生の保持】として歯科医、歯科衛生士からの指導を基に口腔ケアを実践していた。特養は認知機能低下者も多く【認知機能に合った声かけや動作誘導による食事支援】も行われていた。摂食嚥下機能低下のアセスメントでは、【多職種での誤嚥リスクや摂食嚥下機能のアセスメント】が行われていた。嚥下機能の低下は、【嚥下機能低下をむせ込み、口腔内残渣、咀嚼力、食事時間の延長、食事量から判断】し、食事の停止は【食事停止を傾眠、摂食しない、身体の傾き、集中力低下、体調不良から判断】が行われていた。

食事ケア時に感じる困難は、【食形態を下げずに支援したいが安全面から叶わないもどかしさ】、【認知症や難聴のある人の摂食嚥下機能低下への対応が困難】であった。

誤嚥予防として食形態の検討、姿勢調整・頸部前屈位や一口量、ペースの調整を実施していることが分かった。特養に入所する高齢者の2~6割に咽頭残留があることが報告されており、咽頭残留による嚥下後の誤嚥も考慮したケア実践が期待される中、咽頭残留への主なケアは、姿勢調整や食事の中断が実践されている程度であった。咽頭残留へのケアとして効果的とされている、交互嚥下や空嚥下の実践内容の語りはほとんど聞かれず、通常実施しているケア実践に交互嚥下や空嚥下を加えた援助方法についての教育を提供していくことが有用と考える。また、対応困難として、認知機能低下者には適切な行動への誘導が難しい語りがあり、高齢者が望ましい行動をとれるように誘導する援助に工夫が必要であることが分かった。認知機能低下を有する高齢者数は多く、認知機能低下を有する場合は施設職員の援助が必須であるため、援助については実践負担が大きくなりすぎない方法を考案する必要があると考える。以上のことから、特養で有効かつ実践可能な咽頭残留除去ケアプログラムを構築することが先決と考え、本研究は2022年で研究計画を変更し新規科研申請を実施するに至った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 天木伸子、鎌倉やよい、百瀬由美子
2. 発表標題 特別養護老人ホームにおける誤嚥性肺炎の予防ケアの実践内容
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	百瀬 由美子 (Momose Yumiko) (20262735)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授 (33941)	
研究分担者	藤野 あゆみ (Fujino Ayumi) (00433227)	愛知県立大学・看護学部・教授 (23901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------